

平成18年
5月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



孤独

お米のプディング

子供への影響力

共鳴する自我と結婚生活の技術

リュックの先生 東へ西へ:「卒業」

1900年あたりを考える

現代の社会的問題の一つとして取り上げられるのは親世代と子供世代の世代間の文化や価値観の違いによって起こる相違である。これは子供の教育に悪影響を与えかねない。教育の時期が非常に重要なのである。時期が遅れると効果がない場合も少なくない。p.10



葉種雨の頃、肌寒さがちょっと恨めしくなりましたが、植物にとっては恵みの雨、新芽を伸ばし花のつぼみを膨らませ刻々と姿を変化させる様子に驚嘆させられました。いつも通る桜並木も、満開時には薄ピンクの雲が頭上に続いているようでしたが、葉桜となった今はみずみずしい新緑へと姿を一変させました。晴れた朝にその下を通り過ぎると身も心も一瞬にして消められるような爽やかさに包まれます。

5月の年中行事といえばこどもの日、子供の成長を喜び祝うのにまさに相応しい季節です。子供の成育、特に生まれてからの数年間には驚くべきものがあります。昨日と今日、それどころかつい一時間前と今を比べても新しい変化に気付かされることの連続です。子供が次々と獲得していく能力を見ると、大人となった今では些細などうでもいように思えることにも、極言すれば意識して指一本を動かすことでさえ、出来ると出来ないでは大きな違いがあり、私たちに授けられた素晴らしい能力なのだと思わされます。

新しい子供が生まれると、家族はその成長過程で一喜一憂し、健やかに育ってほしい、幸福になってほしいと願い続けます。特に子供が小さいうちは、子供に秘められた大きな可能性を強く確信し、将来への大きな期待を込めて子供に接すると思います。先の見えない未来、不安定な社会でも強く生きていけるよう、きちんと教育を受け立派な人間に育ってほしいとも考えます。

しかし私自身は立ち止まって考えてみると、一つ一つの希望や夢はあっても、子供を育てていくことの根底を貫く何か、心構えとか原理原則といったものが自分の中に柱として存在するか疑わしい限りです。育児書を読めば離乳食の作り方も分かるし年齢ごとの発達段階についての知識を得ることもできる。教育に力を入れたければ評判の良い学校を探すこともできる。でもこれらは小手先の情報にすぎず、一人の人間を育てていくという大役を担わされた大人がどう生き、どのようにそれを子供に示し、どう子供を導くかという命題に対して世間一般は漠然としているのではないのでしょうか。

子供の未来に打算的ではない希望を抱いているのなら、大人一人ひとりがまずその生き方を問い直し行動に移すよう奮起する必要があるのかもしれない。



編集部より	2
人生の指針、道を照らす灯り	3
祈りのある毎日へ	5
お米のプディング	5
フルク（良い性質）	6
預言者ムハンマドが教えた予防医学	8
子供への影響力	10
ご病気の方々へのメッセージ	13
子供のもつ可能性	15
『少年時代』 Zikkimin Kōkū	16
今月のインタビュー	18
共鳴する自我と結婚生活の技術	19
リュックの先生 東へ西へ	25
1900年あたりを考える	27





真の生

人生とは、子ども時代には芽吹きや喜び、青年時代には形而上^{けいじょう}の緊張、奮闘の精神、老年時代には親友たちに出会いたいという希望で常に力強く生きていることの代名詞である。しかしなんとつらいことか、教えを否定する人の眼は、それを時には喜劇と見なし、人間における喜びや感謝の思いをつぶしてきたのである。

孤独

孤独であるという思いは、心を永遠の生に向けて備えることができず、その精神において無限という概念が発酵することのない、哀れな人たちの不治の苦しみである。信仰によって感情が立ち上がり、魂が存在の真のあり方を見る瞬間までは、その悲観主義の、霧に覆われた雰囲気から救うことは不可能である。また、あらゆる被造物と抱擁を交わし、あらゆるものと親友、友となることも不可能である。

深いところ

人における感受性のあり方は、生き方、味わった苦しみ、困難さに比例して発達していく。ろくな苦勞もせず、考えることも苦しみを味わうこともない人たちの感情世界は、他の経験同様、決して発達することがない。そういった人たちは、決して、全ての被造物と一体となれることもない。

不正

常に不正を働く者たちは、誰も干渉しなかったとしても、いつの日か必ず、自らの不正で覆く^{フスグ}ことが宿命づけられている。そう、悪の道は遅かれ早かれ、悪に攻められ滅亡するという地点に至るのだ。

災いは、持続的に見られたとしても、それは一時的なものである。寿命が尽きれば、それらも、他の物事のように死に、去っていく。ただ、時には私たちの人間としての価値をも奪い、一緒に持ち去ってしまう。

いくつかの心の病

真に信心深い人とは、同時に高い徳をも身につけている人のことである。その人の崇拝行為には見せかけはなく、行動には偽りがなく、その心には悪意やいがみがない。見せかけは人をアッラーから遠ざける。偽りは人をアッラーから、かつ人々から遠ざける。悪意は憎悪を、いがみは恨みを呼び起こす原因となる。

逸脱

これまで、「メフリカ女王」(カーフ山に入るといわれる、想像上の姫。非常に美しいとされている)のために、未知の世界へと帆を掲げて旅立ったことが何度あったことだろう。しかし、熱情にかられて砂漠に至ったレイラ(悲恋の物語に出てくる女性)を見つけることもできなければ、出発した岸へ戻ることもできなかったのだ。

一つの集団が、自らの精神基盤から遠ざかるにつれて、ものの見方にも変化が出てくる。価値の基準も根底から覆される。このような集団では、聖戦が「残虐行為」と呼ばれ、抑圧が「正義」と名づけられる。歴史に呪いを残す。その時代の不快な有様を天にも至らせる。美德はひどい待遇を受け、恥知らずであることが普通と見なされ、純潔さはあだを返される。図々しさは自然なことと見なされる。人々と、そして過去と結びつきを保っていることは最も低級なことであるかのように非難される。そして基盤を持たず根無し草のようであることや、そういった人々がま

さにのさばるようになるのだ。

異性と親交を結びたいという執着、常に一緒にいたいという熱望は、弱さのしるしであるか、本質における悪い状態、もしくはその性における特質を自分も持っているという証拠である。

無知であること

無知であることは、物事の上に引かれたベールのようなものである。そのベールを取り除くことができない不運な人たちは、決してこの世界の高尚な真実に入っていくことはできない。最大の無知とはアツラーを知らないことである。ことに、これが利己主義と結びつくと、もはや手の施しようのない状況となる。

この世界の真の顔

一部の人はこの世界を、若干のお金や、物質的・精神的調子のよさでできていると見なしている。これは、全てが物質に依存するものとし、この世界を、知っているもの、目でみているものに結び付ける人たちにとっては正しいことであつたとしても、真実に目覚めた人々の目は、騙されている、としかうつらないものである。

今日この世界を破壊しようとしているものは、その均衡を保とうとするものよりも多く、また影響力も強い。力のバランスに影響を与える霊的・精神的力がなかったら、今日の状況において善や良が大きな位置を占めるであろうと見なすことは困難である。

罪深い魂

人はしばしば、自分の心のレンズを通して他人を見る。それにおける霧や煙によって、全てを、全ての人々を曇った状態で見ると。そういう状態で出した結論は、暗く、無慈悲なものとなる。こういった状態に陥った自己中心主義者は、周囲の全てがだめになったとみなす。しかし本当にだめになったのは、彼自身なのである。

子どもじみた精神

私たちの上の世代の、私たちに対する愛情、親切さを、私たちが必要としているものであり、かつ彼らの偉大さのしるしでもあると見なすこと、そして私たちの徳や敬意がその愛情の継続の要因になっていると認識し、無遠慮さから遠ざかることが必要である。派手派手しく、つけあがった人間に成り下がってはいけない。彼に対する好意を悪用する子どもじみた精神を持った、自分を見失った人々はなんと哀れなことか。





ドゥア (祈り)のある毎日へ

アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

形を与えるお方

整え創るお方

(すべてを) 消らかにするお方

すべてを光り輝かせるお方

望む者を前に来させ、その^{ほまれ}替れを

優先させるお方

(罰を) 延期させるお方

すべてを容易にするお方

警告するお方

吉報を告知するお方

統治するお方

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。

私達を地獄の炎からお助け下さい。¹



レシピコーナー

お米のプディング

材料：

牛乳 1リットル

砂糖 250ml

米 1/2カップ

シナモン 適量

作り方：

1. 鍋に米と水(米の倍の水を入れて煮る
2. 米が柔らかくなったら牛乳と砂糖を入れる
3. 煮立ったら器に入れて冷蔵庫で冷やしてシナモンをふる

¹ 偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) には、祈願(きがん)、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要で、本来、偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。

フルク(良い性質)²

フルクは気質、気性、性格といった意味に加えて、被創造物の要素のうち最も重要なものとして、アッラーの道の旅人が切望するゴールです。簡潔に言うと、この状態は人がアッラーの性質や行動の方法を身に付けたということです。たとえば、アッラーは寛大なお方です。そのため、人は寛大でなければいけません。この神聖なゴールに達成した人は、どんな良い行いも容易になすことができます。

ハルク(被創造物)とフルク(性質)という単語は同じ語根からできています。ハルクは外観や外見など、存在するものの要素のうち、目に見える物質的なものと関係があり、フルクは精神的要素や意味、内容と関係があります。人をその外見だけで判断することはできません。その人の本当のアイデンティティは性格や気性、生来の気質にあるからです。どれだけたくさんの異なるイメージが映し出されたとしても、その人の本当の性格や気質といったものが、ゆくゆくは明らかになっていくのです。前イスラーム時代のアラブの詩人による次の言葉はなんと意味深いものでしょうか。

人が悪い性質を持っていたら、それは遅かれ早かれ明らかになる。

それを隠し続けられると彼には思い続けさせてやれ。

言い換えると、外見というものはごまかしであり、すべてのごまかしを取り除き直すことによって、人の本当の姿が表れるのです。教育や習慣を通して、人は第二の性質というものを得ることがあります。そのため、道徳主義者たちは性質を良いものと悪いものに分けますが、この文脈においては、「性質」という言葉を「良い性質」という意味で使いたいと思います。

スーフイズムにおいて人を描写、修飾するのに用いられる、良い精神的生活の最も正しい基準は、フルクです。フルクにおいて数歩でも進んだ者は、精神的生活において前進したとみなされます。奇跡やまばゆいもの、超人的行為などは、それがフルクから出た時には受け入れられるものですが、それがフルクと結びついていないときには価値のないものなのです。

信仰する者としてどんな人が良いのかを尋ねられたとき、預言者ムハンマド(彼に平安と祝福あれ)は答えられました。「行為や性質において良い人である。」これは、『本当にあなたは、崇高な徳性を備えている(聖クルアーン 筆章 68:4)』で述べられているように、アッラーがご自身の最も優れたしもべである預言者ムハンマド(彼に平安と祝福あれ)を、並外れた特別なものをもってではなく、素晴らしい美德と性質によって賞賛され慰められたことから、当然のことと言えます。彼の性質は、彼という創造の目的であり成果でした。預言者の行いはイスラームとクルアーンを具現化したものでありました。そのため、預言者の妻アーイシャ(彼女にアッラーのお喜びがありますように)はサイド・イブン・ヒシャームに預言者の行いについて聞かれたとき、次のように答えたのです。「あなたはクルアーンを読んでいないのですか?彼の行いはクルアーン(を具現化したもの)です。」

『本当にあなたは、崇高な徳性を備えている(筆章 68:4)』という節は、預言者(彼に平安と祝福あれ)の類

² この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

い稀なる行いはクルアーンに基づいていたということを示しています。彼の外面的及び内面的能力と感覚、彼の存在自体や性格の有形無形の側面に加えて、預言者(彼に平安と祝福あれ)は人間の美德の最も有名かつ最も偉大な見本となるのに必要な潜在力を生まれながらにして持たれていました。これらの潜在力を最大限の可能性にまで伸ばすことで、彼は人間の素晴らしさを最大限に実現したのです。

このような状態に満足することなく、『本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を熱望する者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範であった。(部族連合章 33:21)』と述べられているように、彼は彼に続く者たちの完璧な見本を確立し、それによって次第に彼らをあらゆる時代の中で最も徳の高い共同体へと変化させていったのです。「信仰する者たちの中で最も素晴らしい者は行いにおいて最も素晴らしい者だ」や「人は崇拜行為では渡れない距離を、良い行いで横断することができる」「(来世の)天秤で測られる最初的美徳は、良い行いである」というような^{ことば}諺や、彼が人類にもたらした完璧で有益な原理を用いることによって、彼は彼に続く者たちを天使たちのいる王国へと導いたのです。

フルクのしるしは次のように要約されています。この性質を持つ人は言葉でも行動でも誰のことも傷つけることはなく、自分を傷つける者は許し、なされた悪行は忘れ、悪行に対して善行で返す。『本当にあなたは、崇高な徳性を備えている(68:4)』で賞賛された預言者(彼に平安と祝福あれ)はこれらの美德の最も素晴らしい見本です。彼は彼の前に立ち、公正にするようにと言った人に対しても、彼の頭に砂を投げ彼を侮辱した人に対しても、彼の潔白で最愛の妻アーイシャを中傷した人に対しても、気分を害されることはありませんでした。事実、彼はその人々が病気になった時にはお見舞いされ、彼らの葬式の行列にも加わられました。フルクがアッラーの恩恵を受けた彼の存在自体の要素だったため、彼はそうされたのです。

良い性質を持ち、温和な態度で博愛主義のように見える人は多くいますが、良い行いや温和さは見せ掛けに過ぎないことが少なくありません。少しの苛立ちや怒り、不快な扱いを感じると、彼らの本当の性質が明らかになるでしょう。フルクを持つ人は大変不快な時にでもその態度を変えず、温和さを保ち不快感を表しません。フルクに開かれた心は、まるで怒りや激情を埋めることができる広い場所のようです。悪い行いを示す不寛容で我慢ない人々は、まるでカイン³のように、大ガラスよりも愚かで、怒りや激情、敵意を埋める場所を見つけることができないのです。

次の対句でこの議論を終えることにしましょう。

人が素晴らしくなれるのは、フルクによってである。

世界の秩序が保たれるのは、フルクによってである。

³ カインは旧約聖書、『創世記』偽典『ヨベル書』に登場する人物。第2ヨベルの第3年週にアダムの妻がカインを産んだ旨記載がある。地上で誕生した最初の子供として初めの人間夫婦アダムとイヴに生まれた長男。アベルの兄。ヘブライ語のカインは槍を意味する。創世記では最初の殺人を犯した者とされる。



‘預言者ムハンマドが教えた予防医学

預言者ムハンマドには、医学的、特に予防医学に関して語られた非常に多くの言葉がある。そもそも医学において予防医学の占める部分は大きい。なぜなら、医学の根本的なことは人を病気にしないことであるからである。そしてこれは容易である。病気になってからそれを治療することの方がずっと難しく、お金もかかる。預言者ムハンマドがこのことに重きを置かれ、医学に関する言葉のうち多くが予防医学に関することであるのもこのためである。

預言者の時代、特に外部から入ってきた医者は、マディーナで仕事を見つけることができなかった。その理由は、預言者ムハンマドのこの点における教えが履行^{ムカッ}されていたからである。

預言者は、心や精神の医者であるという任務を果たされるのと同様、物質的な意味でも医者のもようであられた。周囲の人々を精神的、肉体的な病気から守るために努力されたのだ。

1. ペスト症隔離

ペストは預言者ムハンマドの時代、予防法もない恐ろしい病気であった。今日エイズが何であれ、当時のペストはそういうものであったのである。ペストに対して教友たちは非常に気を遣った。なぜなら、預言者ムハンマドは常にこの病気について警告され、注意を呼びかけておられたからである。彼らは、自分たちの中では清潔に、気をつけて生活していた。しかし、軍事行動としてダマスカスやシリア、アンタキアなどに行く際には、ビザンチンによってもたらされたペストにもさらされたのであった。アンワスにおけるペストはこの種のペストであり、三万人の教友たちが犠牲になったのである。⁵

当時、ウンマの最も信用できる人、アブー・ウバイダ・ビン・アルジャッラーフも、アンワスにいた者の一人であった。彼こそは、聖ウマルが何年も後に剣による傷で床についた時「アブー・ウバイダが生きていれば私の代わりとして彼を推薦しただろう。⁶」といった人物である。

ナジュランの者たちが、預言者ムハンマドに、誰か信用できる人を推薦してほしいと頼んだときも、預言者ムハンマドは彼に「この者たちと共に行きなさい⁷」と命じられたのであった。彼はウンマの信頼であり、天国の吉報がもたらされた十人のうちの一人である。そして当時、この幸運な人も、ペストが人間を苦しめていたその地にいたのであった。

¹ この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life-1”よりの訳です。

⁵ Ibn Kathir, al-Bidayah 7/90, 91

⁶ Ibn Hanbal, Fada'il al-Sahabah, 2/742

⁷ Bukhari, Fada'il al-Ashab 21; Muslim, Fada'il al-Sahabah 53-54

聖ウマルのカリフ時代であった。預言者ムハンマドの後継者は、制圧された地を巡回し、その発展を確認していた。アンワスにも行く予定であった。しかし、そこでペストが発生していることを聞くと、戻ることを決めた。アブー・ウバイダがその前に立って言った。

「ウマルよ、アッラーの定めから逃れるのですか」ウマルは答えた。

「いや、アッラーの定めから、またアッラーの定めへと逃れるのだ」⁸

やったことは正しかっただろうか？ 戻ったことは妥当だっただろうか？ ウマルがこの不安に取りつかれると、アブドゥッラフマーン・ビン・アウフが助けとなり、このハディースを伝えたのである。「もし、ある地においてそこでペストが発生していることを聞いた場合は、決してそこに行くべきではない。もし、あなた方がいるところでペストが発生した場合は、逃れるためにその外に出てはいけない」⁹

私はあなた方に尋ねたい。今日、近代医学で伝染病の予防・隔離のために言われていることは、まさにこれと同じではないだろうか。これを預言者ムハンマドは何世紀も前に語られた。そして、今日の医学もまた彼に「あなたの言うことは正しい」と言っているのである。

2. ハンセン病と隔離

アハマド・ビン・ハンバルが伝えるあるハディースで、預言者ムハンマドは次のようにおっしゃられている。「狼から逃れるように、ハンセン病患者からも逃れなさい」¹⁰

このハディースにおける比喩は、一部の者が言うような、ハンセン病の菌やハンセン病患者をライオンに似せる目的でされた者ではない。おそらくは、他にも多く見られるように、この比喩も他の者が作ったものではないかと思う。ここで言おうとされていることはそういうことではないのである。ここで述べられている「逃れる」という言葉は、言葉どおり逃げるという意味ではない。預言者ムハンマドは、このハディースによって、ハンセン病という病気と闘い、それを防ぐ手段を研究することを奨励されているのである。つまり、予防と、伝染を防ぐための処置である。人が、ライオンに出くわして被害に遭わないためにどれほど気を付けているか、ハンセン病に関しても同じように気をつけなければならないということである。預言者の言葉には深遠な意味が込められている。語られた真実には、非常な努力と研究を持ってしか、到達できないのである。

⁸ Bukhari Tib, 30; Muslim, Salam 98

⁹ Bukhari Tib, 30; Muslim, Salam 98

¹⁰ Bukhari Tib, 30; Ibn Hanbal, Musnad 2/443



親として子供に良い例となること

当然全てのムーミン（信者）の親は子供をクルアーンによって、その理想的な社会の完璧な一員として育てようとする。しかし親として言っていることとやっていることが違っていると、子供への影響力が減るどころか逆効果になることも少なくない。自分が言うことで子供に影響を与えたいと考える親は、言う前にそれを自分で信じて、自分で行わないと始まらない。

イスラーム正統四法学派イマームの一人イマーム・ハナフィーが経験された一つの出来事をここで述べよう。

当時一人の子供が蜂蜜アレルギーを持っていて、いくら食べないようにと言われてもその子供は食べ続けていた。その子供の親が子供をイマームのところに連れて行き、“この子はいくら止めるように言っても蜂蜜を食べ続けている”と悩みをイマームに打ち明ける。それを聞いたイマームが“今帰って、40日後にもう一度この子を私のところに連れて来なさい”と答えられる。40日が経ち、子供の父親が子供をもう一度イマームのところに連れて行く。そのときイマームは子供に“これから蜂蜜を食べないで”と言う。そうすると子供は父親に“これからは蜂蜜を食べない”と約束をする。これを見たイマームの弟子達は“どうして最初に言わないで、40日も待たせてから言ったのですか。”と尋ねるとイマームは次のように答える：“子供を最初に連れて来た日の朝私は蜂蜜を食べていた。自分が食べながら子供にそれを止めるように言っても恐らく効果がなかったはず。私は40日間蜂蜜を食べないで自分の身体から蜂蜜を除去してから止めるように言った。”

正しいことを言うことと正しい行動を取るのも重要なのである。親として言っていることとやっていることが矛盾していれば子供の親への信頼が傷つく。一度でも親の嘘を見てしまった子供がそれを覚えている間は子供にとって親は信用できない人となる。だから親として子供の前と言わば天使のように、自分の行動に気を遣わなければならない。子供の信用を獲得した親は子供にとって親でもあり、先生でもある。

失われた青春の静かな叫び

現代の社会的問題の一つとして取り上げられるのは親世代と子供世代の世代間の文化や価値観の違いによって起こる相違である。これは子供の教育に悪影響を与えかねない。教育の時期が非常に重要なのである。時期が遅れると効果がない場合も少なくない。例えば、大学に通っている子供が、小学校の教育さえ受けていない父親より自分を上だと勘違いし親の意見を聞こうとしない場合もある。親として自分が真面目に生きていても、家庭内教育を充分に行わなかった家庭から育った子供は親の手元から離れると自分の親を始め、何もかもに対して批判的になることもある。そういう子供達が集まってどこの国にも時々あるように学生運動を犯したりする。

過去にあった学生運動がなぜ起きたかを分析すれば、その学生達が小さい時に受けた家庭内教育に問題があるか、充分に親の教育を受けていないことが分かる。親として自分が怠った教育の結果に出来上

がったその子供を見て、後から罪悪を感じてもそれはなかなか評価し難いことである。

クルアーンでは十分な教育を受けなくて、他の人を真似して誤った道に走った人たちのことを次のように記載されている。『またかれらは言うだろう。「主よ、わたしたちは、本当に頭や権力者たちに従っていました。かれらがわたしたちを、道に迷わせたのです。』』（聖クルアーン部族連合章 33 : 67）

クルアーンではこのように、失われた世代の叫びをその世代に責任を持つ親、兄弟、親戚や先生に告げることによってもう一度考えるよう呼びかけている。子供の時に純粋で、大人になり始めた頃或いはなってから誤った道を守る人々自身には勿論責任があるが、見守ってくれなかった親世代にはそれ以上の責任がある。

子供がこの世でも、あの世でもなんの役にも立たないことに時間をかけているのを見て、親としてそれを許すと審判の日にアッラーが次のように仰る：

『かれは仰せられた。「あなたがたは以前に行った、ジンと人間の一同と共に火獄に入れ。」そして一同が火獄に入る度に、必ず（先に行った）仲間の一同を呪う。全部の者が、次々にその中に入ると、後の一同は最初の一同をさして言う。「主よ、わたしたちを迷わせたのは、これらの者です。だから2倍の火獄の刑罰を与えて下さい。」かれは仰せられよう。「誰もみな2倍（の刑罰が）与えられよう。だがあなたがたはそれを知らない。』」（聖クルアーン高壁章 7 : 38）

クルアーンの言葉だと、小さい時に抱っこして、大事に大事にと育てた子供たちが自分たちに正しい道を教えてくれなかった親たちのことをアッラーに通報するのである。少しでも信仰を持つ人ならそのように通報されることを恐れて、アッラーにドゥア（祈り）をしなくてはならない。そのためには行動だけではなくて、思考においても子供に良い例になれるように努力を尽くす義務がある。

アッラーと預言者が愛されている家庭で育った子供が、そのような言葉を耳にする程、子供自身のアッラーへの愛情が深まっていく。子供がその家庭その家庭の外に向かっている画面ようで鏡のような存在である。子供を見れば育てられた家庭の家庭内状況が分かる。

子供に見える場所でお祈りと礼拝を行う

家の中にはお祈りと礼拝専用に分けられた場所と時間帯がなくてはならない。一日5回の礼拝は家でジャマア（一緒に）として行うか子供をモスクに連れて行った方がよい。特に母親が生理中で礼拝が出来ない時にモスクに連れて行くことは重要であろう。母親が時には礼拝していないのを見た子供の“礼拝やお祈りをしなくても大丈夫だ”というように誤解するかもしれない。特にそんな時に礼拝の重要性を理解してもらって役立つ。それをこのようにして乗り越えることも可能である：“母親は生理の時にウドゥーしてサჯャダ（礼拝用の小さい絨毯）に座ってお祈り（ドゥア）をする。このようにしてお母さんは礼拝をしているかのようにサワブ（報奨）をもらい、子供にとっては礼拝をしない母親の姿を見せないで済む。”フィクフ（イスラム教学）の本にはこのような解決策が載っている。しつけのためにこれは重要である。これで子供は家の中で礼拝やお祈りをしない親の姿を一度も見ないことになる。子供は逆につきも家庭内ではお祈りや礼拝に対して真剣な親を見ることになる。子供に女性は特別な時に礼拝を休むことを説明できる年齢まで時々一緒にモスクに行くのも重要なのである。

ある日アザーン（モスクから流れる礼拝への呼びかけ）を聞いた時まるで目覚し時計のように“お母さん礼拝の時間だ、お父さん礼拝の時間だ”と立場が変わって今度は子供の方から親に覚えさせてくれ

るようになる。

これ以外に一日の中でお祈りをする特別な時間を作る必要がある。前もって決めていたその時間にアッラーの前で自分の心を開き、悩みをアッラーに打ち明けて、そんな自分を子供にも見せるのも重要なのである。アッラーに祈るとき声を少し出した方がよからう。預言者も声を出してドゥアをしていたのをサハーバ（預言者と同じ時代を生きた友人たち）が聞いてたくさんのドゥアを預言者から学んだ。

親として周りに聞こえる程度の声を子供に教えるつもりでドゥアする。もし、子供に感情的なアッラーの名を聞いたときに震えるような人になってほしければまずはあなた自身からそんな人になることからである。

この歳になっても忘れられないような光景がある。祖母とアッラーとの繋がりやの光景が私にとっては非常に印象的であった。祖母が亡くなったときにはまだ子供だったが、父がイスラームやアッラーについて語り始めると或いはクルアーンを読み始めると祖母がすぐに震え始めていた。祖母の前で心から“アッラー”と声を出せば顔色が落ちて一日くらいその状態が続くのであった。そんな祖母が私にとって非常に印象的であった。祖母は学校にも行っていないくて大した知識もなかったが、心から涙を流しながらドゥアする祖母の姿が今でも頭から離れない。私はたくさんのイマームの元で学んだが祖母のその姿から学んだほどには誰からも学ばなかった。自分の中のイスラームは祖母と親の心からの態度のお陰だと思ふ。

家庭内で親が取る態度は非常に重要なのである。決まった時間にアッラーの前で正座し声を出してドゥアするのが子供にとって非常に重要なのである。我々にとって最も重要なものの一つであるあの世を考えて涙を流しているのを見ると、子供は一生その光景を忘れられない。実は我々はアッラーの前でまるで目に見えているかのように行動をとらなくてははいけない。礼拝の時もまるでアッラーと一対一で会っているかのように行わなくてはならない。預言者のハディースの中に“私とアッラーの間のある時があって、その時はマラーイカ（天使たち）も他のだれも私に近づかない。”我々もアッラーとのそういう時間を設けて、それを見た子供は時がくるとその光景を自分の信仰の材料として使うのである。成長して大人になってもこれらの光景が子供を助けるのであろう。





ご病気の方々へのメッセージ

第23の治療薬

孤独で、哀れな、不運な患い人よ。あなたの病と共に、孤独や望郷の念が、最もかたくなな心の持ち主でさえも同情させ、憐れみを引き寄せるのだ。その場合、考えてみてほしい。クルアーンで、全ての章の始まりにおいて御自身を「慈愛深く慈悲あまねく」という形で我々に示されるお方、そしてその慈悲からの一筋の光によって、全ての子供たちに対してその母親たちを驚くべき慈悲の形に導かれるお方、毎年春になるごとに慈愛の顕示によって、地上を恵みで満たされるお方、永遠の生での天国や全ての美しいものと共に慈愛の顕示であられるお方、全てを無限の慈愛によって創造された神へ、あなたが信仰によって結びつき、そのお方を知り、病気のその哀れな言葉で救いを乞い願いドゥアーすること。これらによって、あなたのこの故郷から遠く離れた地での孤独な病は、そのお方の慈愛のこもった眼差しをあなたに向けさせるのである。

そのようなお方がおられ、あなたを守ってくださるのである。あなたには全てが足りていると言っている。真の意味で異郷にある人、孤独な人とは、信仰し神にお任せするという形で神への結びつきを持っていない人、あるいはその結びつきに重きを置いていない人のことをいうのである。

第24の治療薬

罪もない病気の子供の世話をしている人、それから無邪気な子供と同じような状況にある老人に奉仕している人よ。あなたの前にはあの世での大きな報奨がある。喜んで、そして努力してその病人達の世話をしなさい。

罪もない子供たちの病気は、その繊細な体にとっての訓練であり、修行であり、将来この世界の混乱さに耐えることができるようになるための注射のようであり、神聖な躰でもある。それと同様に、子供のこの世での生のための多くの英知が秘められており、精神世界や生き方の純化の要因となるものである。大人たちがそれまでの罪から清められることに対して、将来あるいはあの世で、精神的に高められるための注射のようであるこの病から得られる善行は、父や母においても記される。特に、憐れみによって、子供の健康を自分の健康よりも優先させる母親達の行為が天使によって書きとどめられることは、不動の真実とされている。

老人の世話をすることによっては、大きな善行が得られることである。しかしそれだけではなく、老人の（特にそれが父や母であれば）ドゥアーを受けること、彼らの心を満足させること、彼らの恩に報いるべく奉仕をすることは、この世での幸福をもたらすものでもあり、あの世での幸福の要因となるもの

でもあるということは、正しい伝承によって、さらには歴史上の多くの出来事によって確実なことでとされている。

年老いた父や母にきちんと従っていた幸運なる子は、自らの子供達からも同じようにされるのと同じように、親につらく当たっていた不運な子は、あの世での罰だけでなく、この世においてもひどい罰を受けることになるということも、多くの事項によって確かなことである。

そう、老人達、罪なき者たちの世話をするという、ただ身内の世話をするというにとどまらず、信仰の民が彼らに遭遇し、尊敬すべき老人がその助けを必要としているのであれば、心からその老人の世話をすることが、イスラームの教えの要求するところであろう。

第25の治療薬

病を得ている兄弟たちよ。あなた方が特に有効で、どのような症状にも効果のある薬、真の特効薬を求めているのであれば、あなた方の信仰心を広げてみなさい。すなわち、悔悟や許しを求めての折り、礼拝、しもべとしてあることなどによって、聖なる特効薬である信心を、そしてその信心からもたらされる薬を有効利用しなさい。

そう、この世への愛情と結びつきによってのんきな不注意さに陥っている人たちは、この世界ほどの大きな病を精神的に負っている。信心とは言えば、消滅や別離といった衝撃によって傷ついているその精神的存在に、一気に健康をもたらし、その傷を癒し、真の意味での健やかさを与えるものであるということ、これまでも述べてきたことである。

信心という薬は、義務をできる限り果たすことによって効果を示す。のんかさ、快楽、欲望、ハラールでない楽しみにふけることなどはこの特効薬の効果の妨げとなるものである。病は不注意を取り除き、食欲を失わせ、ハラールでない楽しみに走る事を防ぐ。だからそれによって効果を得られるようにしなさい。真実の信仰の聖なる薬を、そしてその光を、悔悟や懺悔、ドゥアーや祈りと共に、有効に使いなさい。

アッラーがあなた方に健康を与られますように、あなた方のこの病が、あなたの病を消滅するためのものとされますように。

アーミーン、アーミーン、アーミーン。



子供の親は自分の子供に様々な可能性を期待します。子供の将来を考えてよりよい教育を与えようとしたり、栄養のあるよい食べ物を食べさせようとしたり、またこれからの歩む子供の人生を考えて様々なアドバイスを与えます。子供は時には親の話を素直に聞き、時には親に反抗します。国や民族に関係なくこういった親子関係はどこでも見られる様子です。

日本では、子供の教育について様々な問題がとりあげられています。教育水準の低下から、礼儀や道徳まで子供の教育についての話はずきません。私は日本で生活をしていますから、日本の子供の教育に関しては「あきらめ」あるいは「放置」といったキーワードがきになります。「あきらめ」や「放置」とは子供が親の言う事を聞かないからといってそこで教育、あるいはアドバイスをすることをやめてしまうという親の態度です。それから「こんな時代だから・・・」といって子供の態度や振る舞いを時代のせいにして見過ごしてしまうという親の態度です。

親から子供へ伝わるこういった一連の教育は次世代に直接影響していきます。なぜなら子供は親からの影響を一切受けないという事がないといえるからです。必ずしも自分の親が自分に十分なアドバイスや指摘をしてくれなかったとしても、自分の子供ができた時に自分が十分なアドバイスや指摘を自分の子供にしないというわけではありません。その反対に自分の親が自分に十分なアドバイスをしなかったから、自分の子供ができた時にはもっと十分にアドバイスをしようと思う人もたくさんいるでしょう。

親子の関係はずっと後世にも続きます。親、子供、孫、ひ孫と永遠に続きます。そんな関係が集まって社会となり、人間の営みが行なわれているのです。そのために「家族のあり方」や「子供の教育」は重要視されなくてはならないことなのです。そのことをいい加減に考える人が増えれば社会もそれなりになってゆきます。子供の教育や質、道徳観は社会の教育や質、道徳観といったものに反映されるといえます。

最初の子供の教育は親によるものが主なものです。そこに言い訳や諦めはありません。子供の教育は親の義務であり、どんな状況であれ、どんな時代であれ必要なものです。子供にはとても大きな可能性があるのに、そんな子供のもつ可能性の偉大さを意識している人は少ないように思います。社会の一員にはまだ小さいと子供を扱うよりは、敏感で柔軟なその小さい子供を、いずれ近い将来に自分達にとって代わって社会で活躍する人々であると意識しながら接するべきではないでしょうか。



『少年時代』 Zıkkımın Kökü

恋人と学問を天秤にかけた結果、恋人は別の男にヨメにってしまった…。そんな切ない状況になったら、あなたなら何を思い返すでしょう？自分の何が悪かったかでしょうか。それとも彼女との楽しい思い出？あれこれと思い浮かぶような気もしますが、今月御紹介する映画『少年時代』の主人公、ムザフェル(ムゾ)が思い返したのは自分の少年時代でした。

1949年のトルコのアダナにて。青年ムゾは恋人と彼女の父親に結婚を迫られるものの、まだ学生であり、学生生活は今後5-6年続くという理由により即結婚は出来ない、と言った結果、恋人は別のところにヨメに行ってしまう。道を行く彼女の花嫁姿を見ながら、ムゾは絶対に勉学を諦められない理由として子供の頃の生活をあれこれと思い返す。

ムゾの家は母は洗濯、父はガードマンをしてやっと生活している貧乏な家であった。父は夢見がちで呑気な性格であるため、母が苦勞する事もしばしばであった。父お手製の家は雨が降れば崩壊し、作ってくれる靴は変なので学校でバカにされるといった具合であったが、ムゾは勉強が好きで学校が好きであった。成績も良く、将来は先生になりたい、という夢を持ちつつも学校に行くお金も厳しいので、ゆでとうもろこしを売ったり近所の親父のお使いに行ったり映画館でソーダを売ったりしてお金を稼いでいた。

ある日、寒いからタダで暖まれて宿題も出来る場所、ということで図書館に行ったムゾは司書と仲良くなり、たくさん本を読むようになるのだった……。

この映画は主人公であるムゾ、つまり風刺作家ムザフェル・イズギュの半生らしいのですが、一昔前のトルコの生活や様々なエピソードが混じり合って、なかなか面白い映画です。ここで描かれているのは、日常生活です。かなりの貧乏をしてはいるけれども、ムゾの芯の強さと父の能天気さとアイデア、なんだかんだと家を切り盛りしていく母と勉強は出来ないがやさしい兄と、この4人の家族間の愛情により、なんだか楽しく暮らしているようです。そんな日々の暮らしの中、色々なエピソードが入り乱れていきますが、始終描かれているのはムゾの勉強好きでした。そしてそれを当然の事として支えていく母であったり、近所の人であったりというなんだか暖かな環境です。そうそう、この映画にはホントの「悪人」や「嫌な人」はほとんど出てきません。それも、ムゾの何事も良いほうにとらえる性格からきているのでしょうか。

「貧乏ながら楽しくあれこれとやって暮らしていき、学問を修めて作家になった話」と書くと、ほのぼのとした映画のようで「(家族仲のいい)古き良き時代の物語」とも捉えられそうな気もするけれど、私はそういう観点ではこの映

画を見ていません。更に「トルコ社会の抱える問題」などを描こうとしている映画でもないと思います。映画を見ていても、監督の意図もそういう事を描こうとしているわけではないような印象をうけます。トルコ人が見たらもっとエピソード一つ一つや時代背景、画面の細部にいたるまであれこれと意味するものがわかるだろうし、監督の「イイタイコト」も深く読めるのかもしれませんが。しかし残念なことに私は日本人で、監督の事も作家ムゾの事も全く知りません。それゆえの判断なので見間違いなのかもしれませんが、これは、何かに出会って勉強が好きになったり先生を目指したりしたという成長のエピソードではなく、好きだった事をやり続け初志貫徹するに至ったという、まさに学問にこだわった人の半生を語るものになっています。

この映画から何か教訓めいたものを引き出すとすれば、「やると決めた事はやる」「お金は何かしら働いて得るものだ」「教育の機会は重要だ」「貧乏でも楽しく暮らせる」とでも言った所でしょうか、どれもあまり重要な事ではないように思います。

私はむしろ、子供の頃の様々な思い出は重要だな、というほうに目が行きました。もちろん子供の頃に限りませんが、人は自分の人生の色々な思い出やエピソードを燃料にして生きていくものなのだな、と。よく燃える燃料もあれば、さほどパワーの出ない燃料もあるかと思いますが、どれもこれも、自分の一大事には自分を支えてくれる財産になります。大人になるまでにはどんどん様々な記憶が玉石混交で溜まっていき、必要に応じてあれこれと取り出してこられるようになりますが、若いうちはもっと若い時、つまり子供の頃の記憶しか燃料に出来ません。感受性の強い若い時の「一大事」に引き出して来られるのは、子供の頃のことだけ。これは、親や子供の周囲の人間にとっても一大事です。「三つ子の魂百まで」ではないけれども、子供を侮ってはいけません。何がどう記憶に残るか、いつ引き出されるかはこちらにはわからないので、子供だからといってうかつな事、いい加減な事、適当なしつけはできませんね…。そんな事をつくづく思いました。

この映画を紹介するに当たってとても残念なのは、この作品が日本ではほとんど知られておらず(トルコで知られているかどうかはわかりませんが)、97年にNHKの「アジア映画劇場」で放映されたっきりで、ムザフェル・イズギユに関する本もなければ監督、役者に関する情報も無いことです。映画に関する情報はいくつかあっても、監督名と子役名を取り違えていたり…。日本でトルコ映画が公開されることはほとんど無いので(あってもちよっとエッチだったり、すごく哲学的なものだったり…)どうしたらよいか私にも分かりませんが、何かの機会があれば、是非見てほしいトルコ映画です。

『少年時代』1993年 トルコ

監督:メムドゥ・ユン

原作:ムザフェル・イズギユ

主演:エムレ・アキユルドゥズ(少年ムゾ)/ギユナイ・ギリキ(青年ムゾ)/メンデレス・サマンジュラル(父) 他



5月5日は「子供の日」という事で、今月は子供についてインタビューをしてみました。

子供について、

- 「体は子供でも魂は私達大人と同じ、大切に扱わなければいけない。」と言った方が居ました。

以前アメリカ人と結婚している友人が、子供に対する躾の事で、ご主人とケンカになると言っていたのを思い出した。「彼女の躾が甘すぎる」と言うらしい。その友人はベースの中に住んでいたのも、何度か私も遊びに行ったことがある。レストランなどへ入ると、子供が走り回ったり、叫んでいたりというような、日本のファミリーレストランのような騒がしさが無く、小さな子供もとても行儀が良い。イタズラしていても、注意するとスグに止めてしまう。

友人の話では、3歳くらいの子供でも自分の事は自分で出来るように、親は手を出さないようにしているらしい。又、子供だと侮っていると、大人の間違いを指摘してくれたりして、逆に子供に教えられる事もある。それが彼女達の子供と対等に付き合う方法なのかもしれないと思いました。

- 誰もが自分の子供は健康に生まれてくると思って疑わないのではないかな？子供も自分も健康である事に感謝していない事に気付いた。

以前水のアレルギーを持つ子供の話しを知りました。人間の体は水分が大半なのに、その子供は、食べ物・飲み物・シャワー等、全てに気をつけなければならない。シャワーを浴びてもスグにドライヤーで全身乾かさなければならないし、喉が渴いても我慢しなければ命の危険がある。

また、ある日突然子供の皮膚が硬くなり、何倍ものスピードで老化してしまう子供「アシュリー」、テレビで見た方も多いのではないのでしょうか？

以前そのような映画がありました。(タイトルは忘れてしまったのですが)映画では、体も大人のように成長して大きくなっていくし、コメディイ的なところもあったので、さほど心が痛むような事は無かったのですが、「アシュリー」を見た時は涙が止まりませんでした。

しかし、どの親御さんも悲観することなく、家族皆が前向きで、命を与えられた事への感謝を忘れず生きている事に感銘を受けずには居られません。



By Sermed Ogretim, The Fountain Issue 52 より

生命は、個人が世界と相互に作用しあうことによって、彼らの自我の中に隠された秘密を明らかにするアリーナである。結婚生活は、2つの自我の相互作用を内包する、人生の一部分である。お互いと共鳴しあう自我は、共鳴しあう行動を生み出す。逆に言えば、調和していない自我は、最終的には結婚生活の破綻につながる行動を生み出す。したがって、円満な結婚生活を守るためには、2人の2つの自我の間に共鳴を生じさせることが不可欠である。この調和は、それぞれの自我を互いに調和させるため、自我と、特別なその手段への理解を必要とする。

男性と女性には、それぞれが人生において果たすべき任務のために最適化された、異なる性質がある。この性質の違いは、根底から異なる自我を必要とする。歴史において見られるように、男性には排他的な自我があり、女性にはより包括的な自我がある。言い換えれば、男性の自我はより自己中心的な生き方に導く。そこでは生活共同体は明白に異なった個人によって形成されるものである。女性の自我はより共同体的な生き方を導く。そこではこの生活共同体はその人自身のイメージである。この違いは、自我の特性が、男性においてより濃度の高い状態で見られることを示す。そしてこれは彼の個人的性格に見出すことができる。そのため、自我の性質と影響を理解するためには、男性を研究することがより容易である。

自我の重要な2つの側面を確認するために、以下の問題を考えてみてほしい。なぜ女性は、医者へ行くことをより好むのだろうか。病気になった時、男性はなぜ、最終的な局面に至るまで医者に行くことを拒み、ぐずぐずしているのだろうか。女性は道に迷ったらすぐ尋ねることを望むが、男性は助けを乞わずにすむよう必死に試みるのはなぜだろう。女性は何かを固定したり組み立てたりす
2006年5月 やすらぎ

る時にはすぐ専門家に頼むが、男性は困り果て、専門家を呼ぶ以外にはもうどうしようもない、という状態になるまで自分でなんとかしようとし続けるのはなぜだろう。男性が、彼らが何をすべきか、どうやってすべきかということをお互いに怒り出すのはなぜだろう。

これらの問いは、自己充足と自由の本質を明らかにする。そしてこの2つは自我の重要な側面である。それらは非常に強い結びつきを持つ。その片方が侵害されたなら、それはもう一方が侵害されたことをも意味し、片方の容認のためには、もう片方の容認も必要となるほどである。

自分で何でもできるという思い込みによって、自我は、その不十分さを認めることを望まない。自分で何でもできるわけではないということ認めることは、他人から助けを求めなければいけないことを意味する。しかし助けを受けるということは他とのつながりを意味し、それゆえに自由への侵害と見なされるのだ。あるいは、自由でありたいという思いによって、自我はその力の限界を認めることを望まない。なぜなら力への服従は弱さを意味し、したがって自分が何でもできるわけではないということも意味するものであるからだ。

男性と女性は自我の観点から見ると必ずしも同じではないが、双方共に個性というものを持つ。この個性には前述の、自己充足と自由という本能がある。自己充足と自由は、それらがうまく生かされると、お互いにとって人生の目標を達成するために支えあえる、忠実なパートナーを生むことができる。それらが荒々しく、躰けられないままであると、傲慢さ、自分本位さ、そして不幸な結婚生活というものを導くものとなります。長い目で見るなら、躰けのされていない自我は、自

己充足と自由という本能に圧倒され、そのパートナーとの関係を容易に絶ってしまう。従って、これらを和らげ、導くための努力が必要となる。

この問題に光を投じるために、以下の例を考えてみよう。金属製品の鍛造や成形には、高温および（あるいはもしくは）高圧が必要である。金属を溶かすのに十分な温度があれば、溶かされたそれを型にいれることによって形成が可能となる。温度が十分に高くないのであれば、形を与えるためには高圧が必要となる。しかし、温度が高いほど、低い圧力で金属の成形は可能である。

自我を鍛錬することは、人の性格を形作ることを意味する。それは、自我を形作ることを必要とする。上記の例のように、自我の鍛錬には2つのエネルギー源がある。熱は愛情であり、圧力はおそれである。愛情の熱が自我を溶かすのに十分であれば、人格を形成するのは非常に容易である。だから男性の多くは、恋に落ちると別人になるのだ。

しかし、愛情の熱が自我を溶かすのに十分でないならば、おそれという圧力が、その修正のために必要となる。おそれの源は人によって変わる。例えば神への恐れ、孤独への恐れ、尊厳をうしなう恐れなどである。そして、おそれはもう一つ別の形で現れることもある。それは敬意である。おそれの源が何であっても、そしてどのようにそれが現されていても、それは状況によって必要に応じて性格の修正を可能とし、それによって配偶者との関係の安定を守るという目的でなければならない。

結婚生活の後の期間において、熱烈だった愛が弱まった時、そしてその人の真の自我が現れた時、自我の鍛錬のためにおそれというファクターを使うことはよく見られる。それゆえに、関係の持続を成功させるために特別な努力が必要となるのは、結婚生活のうちでも特にこの期間である。この努力は結婚生活のすべと呼ばれる。これは、

美を示す芸術であり、心に秘められた力である。2つの本能、すなわち自己充足と自由を管理下に置き、それらを導くすべである。この技術は人間の特性の問題、性の特性の問題を含み、そして相互の調和を維持するための原則である。

1：人間性

このセクションで論じられるテーマは、男性と女性双方で見られるキーポイントを含むものである。

過去の生き方：人のそれまでの生き方は、その人がその行動をどうして行なうのかという点で影響を及ぼす。だから人は、意思疎通を成し遂げるためにはパートナーの生い立ちを知る必要がある。

過去の生き方についての知識には、2つの側面がある。誕生前の家族の背景と、両親や兄弟や友人たちの雰囲気。誕生前の家族の背景は、赤ちゃんが生まれる状況に関わってくる。家族の経済的、社会的、精神的あり方は、両親の、子どもに対する態度に影響してくる。こういった状況のうち、両親の過去の生き方は、子どもに与えられた心理的メッセージを示す。だから、親を知ること、その人物を理解する上での重要な手がかりである。周囲の人々の間で相方向的に構成されている雰囲気は、人の本来の個性が、彼らの人生を通じて交流し、作用し合う状況を明らかにしている。この交流は、基準や社会の伝統が何であるかを子どもに教える。これらは個人の動作に動機を与えると共に、制限もする。

過去の経験の結果、人は、その人の生来の性質の前に立つ壁である、性格というものを開発する。したがって、あなたが誰かと交流を持つ時、あなたが対処しているのは、生まれた時からの本質以上に、後で獲得された性質である。それに対応するためには、この第2の個性を理解することが重要となる。過去について理解することはまた、問題に直面した際、忍耐を持ち、慈しみをもち、そしてより懸命に対応することを可能にす

る。

生来の性質：これは神によって与えられた性格であり、あるいはその人の本質といえる。

自我は、この世においては性格の特性を通して自らを理解する。自分の生来の性格を知っている人は幸福であり、人生において満たされている。結婚生活における成功もまた、生来の性格がどれほど理解されているか、それが結びつきにおいて生かされているかという点に強くかかってくる。二人は自分自身の生来の性格、そしてパートナーの生来の性格を知る必要があるのだ。そして、幸福な結婚生活を成功させるためにはそれに従って行動しなければならない。

過去の生き方のために、生来の性格は傷つけられ、あるいは抑えられているかもしれない。パートナーは、関係の初期の頃、愛情と承認の雰囲気、その生来の性格の傷を癒し、本質を取り戻すために必要であると気づく。しかし、本人もパートナーも最初は、どうやって新たに獲得した性質を生かすべきか、どう導くべきか理解できない。お互いを尊重することによって調和が生まれるまで、長い時間がかかる。不調和である状態の結果として、この移行期間において議論が生じる。

生来の性格がさらに抑えられるならば、それを出現させる代わりに、より深い、心因性の心身の症状を引き起こすことがある。例えば家族に対する攻撃的な態度や、現状からの逃避としての長い眠りなどである。さらに、生来の性格の抑制は、コントロールされない心理的メッセージを発することもあり、これは子どもたちにも転写されるものである。これらの秘められたメッセージは、親の心理により、子どもたちに肯定的もしくは否定的な影響を及ぼすことがある。時としてこれらは地価鉞脈のようであり、それは発見されると多くの利益を生じさせる。時としてそれらは、人に、攻撃的な、または（あるいは、かつ）信用できない性格を生じさせるための潜在的なメカニズムの

ように作用する。

生来の性格の出現と抑制には、潜在的な危険性がある。しかしそれがきちんと扱われるならば、生来の性格の出現は、長い目で見れば有益である。賢明な方法は、お互いに忍耐深くあることである。パートナーが生来の性格を理解でき、家族や社会のより有益なメンバーとなれるようバランスを適度に保てるように。

永遠の愛を探す：あらゆる人は、永遠の愛を見つけないという本能からくる思いを持っている。この愛はあらゆる意味で人に安らぎをもたらす。この本能は、よく言われる表現にも顕著に表されている。「末永くお幸せに。」

物語はいつも、結婚式のシーンで終わる。その後のことは無関係とされるのだ。

人生は浮き沈みに満ちている。そして人は、他人の心をいつでも完全に満たすことができない。心は満たされるためには、永遠の愛を必要とするからである。従って人は、莫大なかさの心と、人間としての限られた能力を受け入れなければならない。この承認には2つの含みがある。人は他のパートナーが完全に彼らの心を満たしていると思わすべきではない。そして人は、パートナーの心を完全に満たそうと試みるべきでもない。こういう形で、人は最善を尽くすことができる。そして実際、最善を尽くすべきなのである。

隠された愛の条件：全ての人には、隠された愛の形の条件がある。この条件とは、それまでの人生において潜在意識下で形成されたものである。人は、生まれながらの性格が必要としている何かを奪われた場合、その後の人生でそれを求める。この需要を満たす振舞いは、その人に対する愛のメッセージを伝えるものとなる。一方、個人の生まれながらの性格は、人が愛情を受けたり、与えたりする方法、愛情を示す言葉を形作る。さらに、人の生来の性格と、それまでの人生におけ

る経験との相互作用が、愛の条件を決定づけるのである。

人は自分が誰かに愛されていると感じた時、この愛の条件は自動的に、無意識下に作用を始める。これはパートナーがある行動を行うことが期待されており、また一定の形でそれを行うことが待たれているということである。そしてそれは意識されていない。この秘められた愛の条件の認識不足のため、パートナーはそれに違反することも。無視された、条件を守らなかったと感じ、両者の関係に不満を感じることは、喧嘩や議論につながる。この状況への解決策としては、自分とパートナーのこの隠された愛の条件の存在を意識し、それらを知り、それに応じて振舞うことが必要となる。

継続的發展： 自我は、多くの可能性を備えた種子に似ている。時間の経過とともにこの可能性は急速に成長する。また過去の経験は無意識という土壌の中に蒔かれる種に似ている。それらは時間がたつにつれて発芽する。一部は子供時代に発芽する。一部は青年時代、そして熟年時代、老年時代にすら発芽する。その結果として、関係の進歩に伴って、人が遭遇する個性は絶え間なく変化していくことになる。こういった、発芽に似た個性の変化が、本人やパートナーによって後を追われず、管理されなければ、それらはその力を発展させる。この力は、新しい仕事や新しい機会を求める。この状況は、関係のあり方への不満に結びつき得る。そしてそれは、忍耐強く振舞わない場合、弊害をもたらすものとなり得るのだ。

2 男女間の違い

男性と女性には、それぞれの世界を構成する異なった要素がある。パートナーとの間の均衡と調和を得るために、これらの要素の違いと類似性を理解しなければならない。

1人であることへの必要性： 人によってレベルは異なるが、男性は1人で居ることへの必要性

を持つ。この生来の必要性は、彼らの個々の自我による。自我は自由と自足を求めるのである。1人であることは、男性にとっては自分の心の問題を解決する手段である。自分を日常の窮屈な限界から解放し、リラックスする手段である。一方、女性はストレスを解消したり、活動を行ったりといういくつかの場合に、仲間を必要とする。これは女性のより社会的な自我に基づく。

このニーズの相違は、男女の間に容易に議論を引き起こし得る。家で十分な自由がなく、ストレスが与えられているということに男性は不平を言い始めるだろう。それに対し女性は、男性が家族のために時間を費やすことを怠っていると不平を言うだろう。両者がパートナーの見方を理解しておくことは非常に重要である。女性は、1人で居るという需要が満たされた男性は、特別な努力をせずとも、まもなく戻ってくるのだということを理解する必要がある。男性は、一緒にいるという需要が満たされた女性は、喜んで彼女の夫を1人にしてくれるだろう、ということを理解する必要がある。

言葉の裏を読む： 女性は特に、実際の感情の覆いとして、言葉や動作を用いる傾向がある。以下の例を考えてみよう。苦悩や悲しみがある場合、妻は夫に、非常にささいなことについて、夫のあら捜しをするようになるかもしれない。妻は前兆だとして小さな問題に大きな問題を反映させるかもしれない。そのような態度に出られた時、夫は守りの姿勢に入り、自らをかばい始めるか、大げさだと妻を説得するかの道をとる。どちらの場合においても、妻は「私はあなたの問題を気にかけていないし、あなたが考えていることは間違っている」というメッセージを受け取ることになり、これは話したいという彼女の隠された要求へのどうしようもない破滅的な反応である。

必要なのは、少々の忍耐と、ともに過ごし話を聞くいくらかの時間である。本当の気持ち

攻撃的態度に姿を変えろという例は、他でも見ることが可能である。男性にはそれらを解説する義務があるのだ。

不確定性原理：不確定性原理とは、量子物理学の間でよく知られているものである。この記事のテーマと考え合わせ、以下のように解釈することができる。

無限という精度で実体の状態を定義するのは不可能である。何らかの物体のある側面について学べば学ぶほど、その物体の他の面について学ぶことができなくなる。この原則は次のような形で、男女の心理に適用される。男性と女性双方とも、時にははっきりしないという態度をとりたいたいという本能があり、これは彼らの心理的必要性によるものである。しかし、はっきりしないことへの動機は男女で異なる。夫は、1人で過ごす時間に逃げ込みたいので、妻に対してははっきりしないように自分を見せようとする。一方妻は、夫にいつでも追ってきてほしくて、はっきりしない状態を示すことがある。同じ種類の行動をとっていても、その動機が完全に相容れないことは明白である。だから妻が、夫がはっきりしないことの動機が自分の動機と同じであると見なし、あらゆる場面でいつでも夫を追っていくと、彼女は男性のための不確定性原理に違反することになる。また男性が、彼の妻の求めるところが自分のものと同じであると見なし、妻を放っておくと、彼は妻の期待と完全に反対の行動をとることになる。

男性は男性として扱われなければならない、女性は女性として扱われなければならないということである。

3 保存の原則

保存の原則は、人間の特性の、そしてその性に特有の性質を調和のために鍛錬する基盤を形成する。

人生の目的：パートナーの、人生における

目的は、家庭内の調和を応援するものになり得る。特にそれが双方によって共有されるならば。共通の人生の目標、言い換えるなら目的の統一は、必要によってはお互いへの献身やいたわりを引き起こし得る。多くの家庭では、子供を育てることが人生の目的、かつ家族の目標を統一させる機能としてあげられている。両親は子供のため、外の世界の困難さや彼らの関係における問題を克服しようとする。しかし子供を離れ、ボランティア活動、社会奉仕、宗教的奉仕など他の目標を持つことも可能である。こういった活動は、人生に意義をもたらし、その質を向上させ、満足や安定性を家族にもたらすだろう。

愛：情熱な愛、成熟した愛、そして慈しみの愛はそれぞれ同じではないと知り、受け入れることは重要である。情熱的な愛、若年層が激しく求めるこの愛は、この3つの中で最も持続性がなく、短命である。一方、成熟した愛は長く続くもので、燃えるような愛が春が来るたびに花のように咲く、土壌のように機能する。情熱的な愛と成熟した愛の共通点は、愛するものから見返りを求めるという点である。対照的に、慈しみの愛は、愛するものから何の見返りも求めない、愛の最高段階である。母親の子に対する愛情がこの例である。家族の関係の安定のためには、慈しみの愛は不変の位置を占める必要がある。もし慈しみの愛がパートナーの心によく浸透していなければ、情熱的な愛や成熟した愛が弱まった時、その関係はさらなる継続の安定が望めないものとなる。

双方向の敬意：夫婦は、時間がたつにつれて互いへの敬意を失う傾向がある。互いへの敬意の腐食具合は、パートナーと「心安くなる」過程によるものである。互いのいい部分、悪い部分が見え、個人的なことも露出していく、という時期に、「心安くなる」ということが生じる。その結果、パートナーは惹かれる存在ではなくなり、相手は自分にとってどれほど大切な存在だったかをお互いに忘れてしまうかもしれない。この状態は次に

述べるような事態の発生にふさわしいものとなる。

ちゃんとしたことが理由で起こったけんかが、パートナーが不適当な言葉で不公平に相手を非難する攻撃的なエゴの争いに発展するかもしれない。議論が穏やかになされていない場合、こういったけんかは、相手の親戚や友人の欠点や不足点を述べ立てる行為につながっていくかもしれない。結果として、当初のフェアな議論は、互いの名誉を踏みにじりあうアンフェアな衝突へと変わってしまうかもしれない。

全ての個人は、心理的世界、そして肉体的、精神的世界にプライベートな領域を持っている。これらのプライベート領域を占めることができるのは、本人が同意するものだけである。パートナーの机や部屋に、その人に属さないものを置いてその空間を埋めてしまうのは、物理的な領域を侵すことの一例である。また、パートナーが同じ気持ちを抱き、同じ考えを持つことを強いるのは、心理的、もしくは精神的領域を侵す例である。これらは必ずしも悪意を持って行われるわけではない。むしろ互いの愛情によってもたらされた心地よさの結果、起こってしまうものである。だから、パートナーに与えた愛の代償として個々の領域の占領を求めない、ということが重要となる。

全ての個人は、異なったレベルの、異なった敏感さを持つ。配偶者が互いの敏感さを妨害しなければ、心地よく愛情深い雰囲気は家庭内で感じられるだろう。人は普通、新しく出会った人々の敏感さに対して慎重であろうとする。しかし残念なことに、長い間知っていて、親しい人の敏感さを無視する傾向がある。この関係が結婚に至った場合は、この法則は配偶者にも適用されるものとなる。敏感さへの無視は、制御不可の神経の噴火をもたらすかもしれない。この噴火は、不要な論争を引き起こし得る。逆に、相手の敏感さに対し慎重であるよう努力すれば、この上ないやすらぎが家庭にもたらされるだろう。

まとめるなら、健全な関係を保つためには、以下の3つの敬意を保持しなければならない。すなわち名誉に対する敬意、個々の領域に対する敬意、そして敏感さに対する敬意である。

評価基準の強度：伝統、宗教、個人的敏感さなどに端を発する、強さの感覚や自分のルールを不要とする態度をもつのは不可欠なことである。人生は、いくつかの習慣を諦めたり、他人のためにいくつかの決まりを放棄したりすることを要求し得る。他人を救うために犠牲を払うことを強いられるかもしれない。家庭の安定と個人の性格の保全のために、人それぞれに、妥協したり犠牲を払ったりする際の合理的な優先順位を持っていることが最も望ましい。

双方向的批評：時には、パートナーが客観的に自分たちを見て、必要に応じて態度を調節できるように、互いに関する批評点を用意し、議論したり、批評を求めたりすることをお勧めする。しかし、この種の試練を皆ができるわけではない。誤りを聞いてそれを受け入れることはそれほど皆に普遍していることではないからである。そのような場合は、この批評が新たなけんかの引き金にならないよう、パートナーが尊敬し信頼している人から助けを求めるのも、1つの解決策かもしれない。

結論：家庭を構成している自我は、一致して行動しなければならず、個人の間で連帯感、自足や自由を求める自我の侵食に対抗しつつ、持続している。結婚生活の技術は、幸福で永続的な関係のため、自我のこれらの傾向を調節し、誘導することを助ける。全ての夫婦はこの技術を実行するべく努力すべきである。自由や自足はパートナーを統治することはできず、結婚の破綻につながるものである。

このテーマに関する私たちの議論において、貴重な観点を示してくれた私の妻に、感謝したい。



その6 「卒業」

今年の3月、6年間共に学習した二人の中学生が卒業しました。二人とも、事情があって幼時のときに大きな病院の小児病棟に入院し、小学1年生の時から、ずっと訪問教育をうけてきました。

わたしが始めて彼女たちとかかわりを持ったのは、彼女たちが4年生になった春でした。

先輩の教師に連れられて、病室を訪ねた時、二人ともベッドの上でグーグー眠っていました。

「午後からの理学療法の訓練に行く以外は、どこにも行くところがなく、これといってすることもないので、いつもベッド上に仰向けに寝て、一人は音楽を聴いていますが、もう一人は音が苦手なのでそれすらもないのですよ。」

先輩の教師は淡々と話してくれました。

彼女たちは、目が覚めても、ベッド上に寝たままで、8時前後の朝食タイムのときにだけ車椅子に座ります。咀嚼や嚥下^{もじり}がうまくないのでかなりの時間を要して食事をとり、終わると口の周りを拭いてもらい、歯を磨いてもらって、またベッドに横になります。定時のおむつ交換はありますが、これといって何をやるわけでもなく、お昼の食事時間になります。朝と同じように、車椅子に座って食事をし、またベッドへ。訓練のある日は、車椅子に乗って、訓練棟へ行きます。訓練の時間も含めて、30分程度の所要時間です。病棟に戻ってきてベッドに寝て、夕方の食事まで横になったままです。食事が終わると、お休みの時間になります。このほか、週に3回の入浴があります。看護師さんたちの都合で、朝になったり、午後になったり、定まってはいません。

「楽しみにしてるんですよ！」

始業式の日、当時の婦長さんが学習を担当することになった、わたしたちにこう言ってくれました。

「この二人は、週3回のこの勉強しかないのです。」

春は公園を散歩しました。夏は、ビニールプールを使って、足だけの水遊びをしました。秋には、公園のもみじを拾いました。冬は、冷たい北風に立ち向かったこあげをしました。

4年生のときには、外出許可をもらって、養護学校本校の学習発表会に参加しました。

ちょっと遠くの公園へ、校外学習に行き、すべり台や、公園散策を楽しみました。

音楽が大好きなAちゃんは、かまってもらうのも大好き、抱っこされて少々手荒く体を揺り動かされても、

いつもニコニコうれしそうです。

反対に音が最大の苦手な B ちゃんは、かまわれるのも大嫌い。眠っているときに起こそうものなら、大きな声で泣きわめきます。

そんな二人がずーっと、ずーっと一緒に生活をしてきています。おそらく 10 年以上になっていると思います。

わたしたちがおこなってきた訪問教育も、元気ならいつも二人一緒でした。

にぎやかな音楽で、A ちゃんは大喜び、B ちゃんは大泣き。

B ちゃんは、作業をすることも苦手でした。

ベビーバスにお湯をはって、手をつけると、いつもはびっくりして体を硬くしていましたが、ある日、初めて気持ちよさそうな表情をしました。

「気持ちいいでしょ！」小さな声でささやくと、小さな顔でうなずいてくれたような気がしました。

A ちゃんは、勉強が終わってさよならをすると、泣き出します。一人になるのがいやなのです。A ちゃんのお母さんが午後から来てくれて、A ちゃんを抱っこしてくれます。夕方になって、お母さんが帰るときにはまた大泣きします。

卒業式のときの二人は、一張羅の服を着て、つんと澄まして、出席していました。

校長先生の話や、彼女たちのお医者さんのお祝いの言葉を真剣な表情で聞いていました。彼女たちなりに何かを感じたのでしょうか。一緒に参列してくれた看護師さんが驚くほど、二人ともしっかりと参加しました。

そんな二人が、この 4 月から高校生になりました。病院を退院することはできないので、今度は高校生として、新たに訪問教育を受けます。

隣り合わせのベッドで、二人の生活はこれからも続きます。私たちの知らない部分で

二人の結びつきは幾重にもつながっていると思います。本当の兄弟でも、こんなにずーっと一緒に生活をするということはないと思います。

それから二人はお互いのことをどう思っているのでしょうか？可能なら、いつかは質問してみたいと思います。

一人一人の人生をしっかりと歩んでもらいたいと願っています。

さきつちよで ふたつつながる さくらんぼ



春ですね。私も、また新しい生活がはじまり、あわただしくも充実した日々を過ごしています。そんな私ですが、最近、「1900年あたりのこと」を考えてみるようになりました。そのきっかけをお話します。

今年の1月15日、夫とともに、「ミュシャ展」に行ってきました。アルフォンス・ミュシャ（Alphonse Mucha）は、現在のチェコ共和国のモラヴィアで生まれた、アール・ヌーヴォー様式の代表である人だそうです。美術のことはよく知らないけれど、そんな私にとっても、大変興味深い内容でした。

まず、美術作品鑑賞の初心者にも優しいのは、「分かりやすい」ことでした。色鮮やかで、綺麗なのです。細かいのです。華やかなのです。うまいのです。分かりやすく、美しいのです。綺麗だけではありません。『メディア』のポスターは本当に怖くて、ぞーっとしました。

しかし、それだけでは終わりませんでした。「ミュシャ展」の会場は、2階に分かれていて、まず最初に上の会にある作品を鑑賞し、次に下に下りるといった形でした。一番すごいと思ったのが、上の階の華やかで、人の目を引く作品たちと、下の階に展示されていた作品の一部の、「商品」ではない絵や、パステル画たちの対比性だったのです。

同じ年代の上の階の絵を思い起こすと、ほんうに、「ええーっ？！あんな絵を描いていたのと同じ時期に、こんな絵も描いていたの？」と思うほど。それから、デザインのテキストみたいな本用の図の習作のデッサンの細かくて丁寧で、きちんとしていること！基本がしっかりしていることが、独創の羽を羽ばたかせる要だと痛感しました。本の挿絵のために描かれたある絵たちは、黒炭だけが使われているのが印象的でした。

また、何と言っても<スラブ叙事詩>です。6X8メートルが20点ですよ！もちろん、実物は無理なので、習作を覗きました。モラフスキー・クルムロフ城に観に行きたいと切に思いました。

ミュシャが初めて制作したポスター<ジスモンダ>は、1894年、私が上と下の階を比べて「うわー」と思った作品群が、ちょうど1900年ごろ、その後アメリカ時代を経て故郷に戻るといように、彼は19世紀から20世紀への世紀の変わり目にちょうど活躍されていたということもあって、芸術も歴史を映すのだなと感じました。21世紀の初めに生きるものとして、1900年周辺のことをもっと学ばないといけない気がしたのです。

1900年周辺と言えば、アインシュタインの三大業績、ブラウン運動の理論、光子論、そして特殊相対性理論が発表されたのは1905年です。彼が26歳の時でした。私は、卒業論文のために、ほんの少しですが、「非可逆性」や「エントロピー」について調べたことがあり、また、漠然とですが、宇宙空間の様々な謎について、興味を持っていたこともあって、最近、アインシュタインの理論についての概論書などを読み始めました。

また、1900年から、2000年までの、20世紀の100年を描いた歴史ファンタジーがあります。ラルフ・イーザウの『暁の円卓』です。日本語訳版は全9巻で、それぞれ、「目覚めの歳月」「情熱の歳月」「暗黒の歳月（前編）」「暗黒の歳月（後編）」「失意の歳月」「孤独の歳月（前編）」「孤独の歳月（後編）」「憤怒の歳月」「希望の歳月」となっ

います。近所の図書館で探したところ、これら9巻が市内のあちこちに散らばっていたので、大学の図書館にリクエストして入れてもらいました。実は、まだ全部読めていません。

2000年は私が大学に入学した年であり、翌年、21世紀の初めの年に私は結婚しました。このように、個人的な転機の時期でもあった「21世紀」の変わり目ですが、100年後、人々はどう振り返るのでしょうか。そんなふうな未来へも思いを馳せつつ、1900年あたりを再認識しています。

* * *

アインシュタインの理論についておすすめの本（入門）

『アルバートおじさんの時間と空間の旅—アルバートおじさん（1）』

ラッセル・スタナード著 岡田好恵訳 くもん出版

☆子どもから大人まで楽しめます。

『アインシュタイン相対性理論の誕生』安孫子誠也著 講談社現代新書

☆物理学史の視点からアインシュタインの三大業績を読み解く、興味深い本です。

そして・・・『暁の円卓』全9巻 ラルフ・イーザウ著 酒寄進一訳 長崎出版

『暁の円卓』



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部200円（日本以外は1部250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005（春日部） 口座番号：7315959 口座名義：Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部